

行為者と観察者の認知

— 帰属研究を中心に —

坂 西 友 秀

はじめに

対人関係は力動的な相互作用を含む通程であり、行為者および観察者としてののかかわり合いの過程でもある。すなわち、交渉をしている主体に注目すれば、まさに瞬間瞬間相手に対応している行為者であり、相手の一挙手一投足に気をつけて観察している主体に注目すれば観察者となる。

帰属に関する研究においては、行為者と観察者の行なう対人行動の認知には多くの場合違いのあることが認められてきている。Jones & Nisbett (1972) は、両者の認知(帰属)の違いを「行為者は行動を状況の要求に帰属する一般的な傾向があり、観察者は同じ行動を行為者自身に帰属する傾向がある (p.80)」と表現している。たとえば、「何もやっていないのに先生は僕をみるとすぐ注意する」・「何かあるとすぐ私を呼びつける」などという生徒の声をよく耳にするが、これらの問題も見る側(教師)の認知と見られる側(生徒)の認知に違いがあることが大きな原因になっている。

この教師と生徒の認知の違いの例にみられるように、対人関係を結んでいる二者あるいはそれ以上の者の間に生ずる認知とりわけ帰属の違いは、その後の相互の行動に影響を及ぼし、規定する。したがって、我々が行なう帰属がどのような心理的要因によって影響され規定されているかを理解することは、対人関係を営む上で大きな意味をもっているのである。ここでは、行為者と観察者の帰属に差異を生じさせる要因、およびその差異を軽減・緩和させる条件について検討する。

I 行為者と観察者の帰属を規定する要因

Jones & Nisbett (1972) に要約される行為者と観察者の帰属の違いはなぜ生じるのであろうか。Bem (1972) は自己知覚と他者知覚の問題を論じる中で、行為者と観察者の帰属の違いを生じさせる要因について言及している。Bem は Jones & Nisbett の考察を考慮しながら、主に四つの要因を提起している。Bem のあげる諸要因は、行為者と観察者の情報利用の違いあるいは処理過程の違いと、両者の動機づけの違いの観点から二分できると思われる (Jones & Nisbett, 1972; Kelley & Michela, 1980)。本稿では Bem のあげた要因に沿って検討をすることにする。

1. 部内者(Insider)と部外者(Outsider)

帰属作用に用いられる情報には、行為者は利用できるが観察者には利用の困難なものがある。たとえば、課題解決に費やす努力や課題の難しさに対する感情等は、行為者が体験する過程で得られるものである。それに対して観察者はこうした体験の過程に伴う情報を欠いている。そのために、努力を軽視したり課題を容易なものとして見るかもしれない。

この要因が作用するとすれば、行為者は自らの体験を熟知できるから、努力や課題の困難さに達成結果の原因を帰属する傾向が強まると考えられる。このことを直接検証する研究は見られないが、Bar-Tal & Frieze (1976) の達成結果の原因の帰属に関する研究は、行為者の方が観察者よりも努力への帰属が強いことを示している。

同様に、行為者が努力に比較的強い帰属をする傾向のあることを示す研究がある (Ender &

Bohart, 1974; Luginbuhl, Crowe & Kahan, 1975; Kuiper, 1978)。

このように、自己の内的状態を直接経験している行為者の部内者としての特徴と、それらを欠く観察者の部外者としての特徴との違いが、両者の帰属の違いを生む一つの要因と考えられよう。

2. 既知者 (Intimate)

と未知者 (Stranger)

人が行動する時には、その行動に関連した過去の経験あるいは個人史についての知識を持つことが多いであろう。したがって、行為者は現在の行動と過去のそれとの一貫性に敏感であり、一貫性のない行動は状況にその原因を帰属すると思われる。他方、観察者は行為者の過去に関する知識を欠くために、行動は行為者の安定した傾性に起因すると認知する傾向が強いと考えられる。

Nisbett, Caputo, Legant & Marecek (1973) は、このような考えを支持する結果を得ている。実験では女子大学生が、恵まれない人々やマイノリティ・グループの学習及び教育に関する研究に、自発的に参加することの有無を決定する事態が設定された。被験者は、参加の決定を行なう者（行為者）と観察者に二分された。参加の有無の決定が終了した後で、両者は決定を行なった理由及び別の研究への自発的参加の有無を推定する質問紙に回答した。

その結果、観察者は行為者よりも自発的参加を決定した被験者が、別の研究に対しても自発的に参加すると予測する傾向が強いことが明らかになった。また、他者の行動は当人のパーソナリティ特性に、自己のそれは状況に帰属する傾向が強かった。換言すれば、既知者としての自己の行動に対しては状況への帰属が強く、未知者としての他者のそれに対しては傾性への帰属が強くなることを示している。

また Hansen & Lowe (1976) は、Kelley (1967) の提起した三つの基準¹⁾、すなわち合意性 (consensus)、特異性 (distinctiveness)、一貫性 (consistency) の認知の仕方が行為者と観察者とでは異なることを明らかにしている。彼らの

研究においては、行為者は特異性や一貫性の情報に強く依存するが、観察者は合意性の情報に強く依存する傾向があった。

さらに Eisen (1979) は、行為者は観察者よりもポジティブな行動を過去の行動と一貫しており非特異的なものとして認知する傾向が強く、ネガティブな行動に対しては逆の認知をする傾向の強いことを明らかにしている。

これらの研究の他に、行為者と観察者の情報利用の違いを示す研究がいくつか見られる (Hansen & Donoghue, 1977; Ross, Greene, & House, 1977; Hansen & Stonner, 1978)。

しかし、Nisbett et al. (1973) は、他者に関する帰属においては既知か未知かの熟知の程度はほとんど影響しないことを示している。

また、Taylor & Koivumaki (1976) の研究においては、ポジティブな結果を人にネガティブな結果を状況に帰属する傾向は、配偶者や友人で最も強く、未知の人では弱いことが明らかになった。

以上のように、当該の人を熟知している程度がどれだけ帰属作用に影響するかについては、必ずしも明確にされていない。しかし少なくとも、行為者に関する行為者自身と観察者との熟知度の違いは、両者の帰属に影響していると思われる。すなわち、行為者は自分の過去の行動を熟知していることから、過去の情報を欠く観察者よりも行動の一貫性に敏感であり、それゆえ状況に原因を求める傾向が強いと考えられる。

3. 自己 (Self) と他者 (Other)

人は脅威に曝されたり自尊心を低めることを嫌うであろう。また、多かれ少なかれ自尊心を高めることを望むと思われる。そして、この傾向は所与の事態への関与が強いほど強力に作用すると思われる。したがって、直接事態に関与する行為者には、こうした傾向が強まると思われる。他方観察者は、行為者が自己に何らかの影響を及ぼしたり、かかわりを持つ場合を除いては他者であり、上記の傾向が比較的弱いと予想される。

こうした自己と他者の差ともいべき行為者と観察者の違いは、次の帰属傾向に反映される

であろう。行為者は、ポジティブな結果の原因を自己に帰属し〔自己高揚的帰属 (self-enhancing attributions)〕、ネガティブな結果の原因を自己に帰することを避ける傾向〔自己防衛的帰属 (self-protective attributions)〕が強いであろう。

Snyder, Stephan, & Rosenfield (1978) は、帰属作用において利己主義 (egotism) が生じるためには二つの条件が必要であると言う。一つは結果が人に帰属されなければならないことであり、他の一つは行なわれる帰属が当人の自尊心と関係しなければならないことである。これらの二つの要因が存在する時には、自尊心への脅威はそれぞれの要因の強度に依存することになる。したがって、いずれか一方の要因が皆無ならば、利己主義は生じないことになる。

Miller (1976) は、実験状況への被験者の自我関与の程度が帰属作用に影響することを実証している。実験では、被験者は社会的知覚テストと称するテストを受けた。受ける際に被験者の半分は、テストが知性や将来の幸福等の事柄に関して予測性の高いものであることを教示された (高自我関与条件)。他方残りの半分の被験者は、テストは信頼性の低いものであることを教示された (低自我関与条件)。最後に質問紙に回答した。

その結果、高自我関与条件の被験者は、低自我関与条件の被験者よりも成功に対して多くの責任をとり、失敗に対しては責任を回避する傾向が強かった。

Rosenfield & Stephan (1978) においても自我関与の重要性が指摘されている。

Miller の研究は自我関与と帰属作用との関係を明らかにすると同時に、帰属には前述した自己高揚的帰属と自己防衛的帰属の二つが存在することを示唆すると思われる。こうした帰属傾向は、かなり多くの研究で示されてきている (Luginbuhl et al., 1975; Bar-Tal & Frieze, 1976; Larson, 1977; Kuiper, 1978)。

Larson (1977) は、自己高揚的帰属と自己防衛的帰属のいずれが強いかを検討した。彼は、男子大学生のペアが協同作業で課題達成を行な

う事態を設定した。達成後、被験者は平均以上あるいは平均以下の成績をフィードバックされたが、統制群だけは全くフィードバックされなかった。その結果、被験者は成功の原因を自己に帰属するよりも、失敗の責任を回避する傾向の方が強かった。

一方、こうした利己的といわれる帰属を、動機づけの観点ではなく情報統合の過程から説明する立場がある (Miller & Ross, 1975)。

Miller & Ross (1975) は、人は一般に失敗よりも成功を期待することが多いと考えている。しかも、人は期待した結果に責任を負う傾向が強いことから、成功は自己に失敗は外部に帰属されやすいと主張する。さらに、Kelley (1967) の主張する共変 (covariation)²⁷ は、失敗が連続する時よりも成功が連続する時の方が知覚されやすいと考えている。よって利己的帰属を支持する根拠は薄いと言う。¹⁾

しかし、こうした情報処理の過程に対しても動機づけが作用し、歪んだ帰属が生じることも考えられる。最近では、利己的といわれる帰属には行為者と観察者の動機的側面が反映することが認められてきている (Bradley, 1978; Zuckerman, 1979; Kelley & Michela, 1980)。

以上のように、自己としての行為者は他者としての観察者よりも事態への自我関与が強く、利己的な動機づけも強いと思われる。そのため、前者は後者よりも、自己に有利な原因の帰属を行なう傾向が強いと考えられる。

4. 行為者 (Actor) と観察者 (Observer)

行為を行なっている人とそれを観察する人とは、視覚的、あるいは物理的に入手可能な情報の目立ちやすさ (saliency) に違いがあると思われる。

行為者は通常自己を対象として観察することはせず、外界を視野に入れることが多い。したがって、行為者自身にとっては周囲の環境内にある手がかりが図となり、自己の行動は状況に対する単なる反応として認知されるかもしれない。

これに対して観察者は、行為者と状況とを一つの場面として観察できる。したがって、行為

者への注目は背景となる周囲の状況を地として認知させ、行為者を図として認知させやすくなると思われる。このように、行為者と観察者に視覚的な目立ちやすさの違いがあるならば、両者の得られる情報が異なり帰属作用に相違が生じると考えられる。

Storms (1973) の研究においては、この解釈が支持されている。実験では、二人の男子の刺激人物（行為者）が会話をしている場面を、二人の被験者が観察する事態が設定された。会話の経過はビデオ・テープに収録され、会話が終了後に次の三つの条件下で行為者と観察者に提示された。

- 1) 実験状況と同じ視点でビデオ・テープを見る。したがって行為者は相手の会話者を見、観察者は実験で注視した会話者を見る。
- 2) 実験状況と画面を逆転させる。したがって行為者は自らを観察し、観察者は実験で注視した会話者の相手を観察する。
- 3) ビデオ・テープを見ない行為者と観察者。

観察終了後、被験者は会話者の行動が傾性に起因するか、状況の強制に起因するかについて質問紙に回答した。その結果、1) と 3) においては行為者は観察者よりも状況への帰属傾向が強かった。しかし、2) においては、自己を観察した行為者は観察者よりも傾性への帰属が強くなった。このことは、行為者と観察者の帰属が、両者の視野の違いによって影響されることを示している。

以上、Bem の提起した四つの要因に即して行為者と観察者の帰属に差を生じさせる背景を検討してきた。これらの要因は一つが他から独立して作用するというより、相互に影響し合っ
て行為者と観察者の帰属の違いを生み出すと思われる。

II 行為者と観察者の帰属を変容させる条件

行為者と観察者の原因の帰属は、必ずしも一貫した傾向を示しているわけではない。それは、

我々の日常生活における対人関係の複雑性を反映するものであろう。親密な関係、疎遠な関係、協同的な関係あるいは競争的な関係と多様である。そして、これらの多様な関係が渾然一体となって人間関係を作り上げている現実を知るならば、行為者と観察者の原因帰属にも多様性が認められよう。

本節では、行為者と観察者の帰属を積極的に変える条件について検討する。便宜上、次の五項目に分けて言及することにする。

- 1) 視覚的・物理的視点の違いの効果
- 2) 先行期待の効果
- 3) 評価を予期することの効果
- 4) 注意の焦点を変えることの効果
- 5) 心理的視点を変えることの効果

1. 視覚的・物理的視点の効果

行為者と観察者には、視覚的・物理的な情報の目立ちやすさにおいて違いがあることはすでに言及された。人は視覚刺激を手がかりに情報処理を行なうことが多いが、情報源に差異があるならば処理の過程も異なるかもしれない。Kelley (1973) は、帰属作用を情報処理の違いによって二分している。一つは現在ある情報の観察と分析に基づいた帰属作用の場合である。他の一つは、因果関係に関して今までに形成されてきた概念とステレオタイプに基づいた帰属の場合である。後者の場合には、経験の累積によって形成されてきた因果関係のシエマが問題になる。因果関係のシエマとは、所与の効果との関係において二つないしはそれ以上の因果要因が相互作用をする、その様式に関する概念である。シエマは、効果と原因との関係を観察すること等によって形成されると考えられる。したがって成人は因果要因の操作や相互作用についての抽象的・概念的なレパートリを、より多く持つと考えられる。これらの概念は断片的な情報から、合理的で妥当な因果関係を推定するための枠組みを与えると思われる。

また、Carver (1979) も Kelley と似た情報処理過程を考えている。人の注意が環境に向けられ情報を得る時には、入力刺激は先行して存在する当人の認知的シエマに従って分類され、カ

テゴリー化されると考えられている。そして分類の過程で処理されると考えられる。

このように考えると、視覚的刺激が異なれば喚起される認知的シエマも異なると考えられる。その結果、両者の帰属に差が生じると思われる。すでに述べたように、Storms (1973) は行為者と観察者の視覚的情報を変えることによって、両者の帰属を変化させ得ることを明らかにした。

また Taylor & Fiske (1975) も、観察者の視野を操作することによって帰属に変化が生じることを明らかにしている。被験者は、次の二条件で二人の刺激人物の会話場面を観察した。統制群は二人の会話者両方を同様に見ることができるが、実験群はいずれか一方の会話者しか観察できなかった。観察が終了後に被験者は、どちらの会話者がイニシアチブをとっていたかの判断を行なった。また、会話者の行動が傾性を反映する程度について評定した。その結果、イニシアチブに関しては、注目した会話者にイニシアチブを帰す傾向が強かったが、傾性に関しては差が見られなかった。

以上から、行為者と観察者の視覚的な視点 (visual perspective) を変えることによって、両者の帰属を変えることができよう。

2. 先行期待の効果

Feather (1969), Feather & Simon (1971a, 1971b) らは、達成結果の原因帰属に及ぼす先行期待の効果を吟味している。人は特定のタイプのスキルを必要とする課題を経験するにつれて、その種の課題に対する自己の能力の評価を行なうと考えられる。そして、能力の評価が比較的安定するためには、多様な困難度をもつ課題を多くの事態で経験する必要がある。また同時に、自己の達成の良好さや質を判断できる基準の存在が必要であろう。

こうして形成された自己の能力の評価は、所与の事態における特定の成功期待を決定する重要な要因であると思われる。成功期待は当人が所与の事態でできると思うことと、どれだけ真剣に試みるかを反映すると考えられる。また、成功期待の決定には、環境要因の評価も重要な役割を果たすと思われる。なぜならば、能力要

因と環境要因のいずれが上回るかによって、達成の成功・失敗が影響されるからである。

人がある事態で期待と一致した結果を得るならば、先行してもっていた能力の評価と課題の困難さの評価は妥当であったことが確認できよう。したがって、結果の原因は当初の期待通りに能力と課題の困難さに帰属されると予測される。

これに対して期待に反した結果では、当初仮定した評価が妥当でなかったことを示す。したがって、能力と課題の困難さの両要因の評価、あるいは一方の評価を修正しようとする圧力が働くと思われる。しかし、前述したように能力の評価が比較的安定していると考えられることから、過去の類似の状況と同量の努力を払っているなら、これらの要因 (能力と努力) に原因を帰属させることは困難になるであろう。よって、期待に反した結果は一致した結果よりも外部へ帰属される傾向が強いと予測される。

Feather (1969) は達成課題を用いた実験において、上記の予測を支持する結果を得ている。実験では、被験者は達成前に達成への期待を評定した。達成後に成功しないしは失敗の結果がフィードバックされ、被験者はその原因の帰属を行なった。

その結果、期待に反した成功は、期待された成功よりも外的要因 (課題の困難さ) に帰属される傾向が強かった。

さらに、Feather & Simon (1971a, 1971b) は、先行期待を実験的に操作することによって、上記の結果を追認している。

また、Harvey, Arkin, Gleason, & Johnston (1974) は、先行期待の効果は観察者事態にも同様に適用できることを示唆している。

以上から、行為者と観察者の先行期待を変えることによって、両者の達成結果の原因帰属に変化をもたらすことができると考えられる。

3. 評価予期の効果

人が将来何らかの評価が行なわれることを予期する場合と、それを予期しない場合では、原因の帰属が異なるかも知れない。

Wortman, Costanzo, & Witt (1973) は、

5問の例題と10問の正式の問題から成る社会的知覚テストを、ペアの被験者に実施した。被験者の半分は例題に成功し、残りの半分は失敗するように操作された。また、被験者は例題終了後に、さらに正式の問題に回答することを予期する条件と、それを予期していない条件に分けられた。最後に被験者は自己の成績と相手の成績の原因帰属を行なった。また、受けたテストの適否の評定も行なった。

その結果、達成を予期する被験者は、予期しない被験者よりも自己への能力の帰属が有意に少なかった。また、予期する被験者は予期しない被験者より問題を難しく、不適切なものとしてみる傾向が強かった。

この場合、達成を予期する被験者は、その後の自己の結果いかんによってネガティブに評価されることが予想される。したがって、初めから控え目に外的要因に原因を帰属することによって、自己の達成が失敗に終わっても責任を回避できることになる。

Feather & Simon (1971a) は、ペアで課題を達成する事態を用いた研究で同様の結果を得ている。彼らの実験においては、達成を行なう前の被験者は、自己の成功よりも相手の成功を高く予測する傾向があった。

このような傾向には、Bradley (1978) の主張する public esteem の作用が関係していると思われる。public esteem とは、公的な事態で作用しやすい利己的な動機であり、周囲からの評価が意識され、できるだけ他者への印象や映りを良くし自己の評価を高めようとする傾向である。この観点からすると、達成を予期する事態においては、単に前述した自己防衛のためだけでなく、実験者を意識したり、自分が評価する相手を意識する public esteem が作用していると思われる。

Stokols & Schopler (1973) は、将来刺激人物との接触を予期する被験者は予期していない被験者よりも、刺激人物の評価をより好意的に行なうことを明らかにしている。

この結果は、接触を予期する被験者に、刺激人物からの評価や印象を良くするため public

esteem が働いたことに起因すると思われる。

また、Wells, Petty, Harkins, Kagehiro & Harvey (1977) は、行為者と観察者のそれぞれが、当該の実験事態を観察していた第三者との討論を予期する場合には、従来の行為者と観察者の帰属の違いがなくなることを明らかにしている。

このように、刺激人物ないしは評価対象との接触や同一事態への従事を被験者に予期させる場合には、種々の動機が働き刺激人物に対する控え目な評価や帰属を生じさせられると思われる。こうした条件は、行為者や観察者の帰属を変えるのに有効な条件の一つといえよう。

4. 注意、焦点変換の効果

人が一時に複数の対象に注意を集中することは難しい。一般には情報を多く得たいと思う対象に注意を集中する。先に検討した視覚情報の違いも一種の注意の焦点の違いと考えられよう。しかし、ここでは視覚刺激の違いというよりも意識の向かう方向の違いを問題にすることから、便宜上前述の視覚的視点の違いとは区別して検討することにする。

Duval & Wicklund (1972) は、人の注意は主に外界の事象に向けられている場合と、自分自身に向けられている場合とに区別できると主張する。前者の状態は主観的自覚 (subjective self-awareness) といわれ、後者の状態は客観的自覚 (objective self-awareness) といわれている。ここで問題にする客観的自覚とは、自分自身を対象化して認知することを示している。そして、人が自己を対象として認知する時には、自己評価や感情に変化が生じると考えられている。なぜならば、人はそれぞれの社会的行動に対して「正しさ (correctness)」の基準 (standards) や理想としての基準を持つと思われるからである。そして自己の対象化は、自己の現実の行動と理想としての基準との間の分離 (discrepancy) に気づかせると考えられるのである。

たとえば、ある人が自分の歌う歌をテープレコーダで聞いている場面を考えてみよう。この人は、あらかじめ持っている自分の理想的な歌い方と、テープレコーダから流れる自分の歌と

の間に隔たりを感じるであろう。自分の歌が基準より劣る場合にはネガティブな感情が経験され、まさる場合にはポジティブな感情が経験されるであろう。

Ickes, Wicklund, & Ferris (1973) は客観的な自覚を高めることによって、上記の考えを支持する結果を得ている。彼らは、女子大学生に現実自己と理想自己の評定を行なわせた。被験者の半分は自分の声をテープレコーダーで聞きながら（高客観的自覚条件）、残りの半分の被験者は別の女性の声を聞きながら回答した（低客観的自覚条件）。

その結果、客観的自覚が高いほど自尊心が低くなること（現実自己と理想自己の分離が大きくなること）が示された。

Ferris & Wicklund (1975?)³⁾によれば、自己への注意を分散させることによって上記と同様の結果が得られることが明らかにされている。被験者は次の三つの条件で自分自身を好きか嫌いかの評定を行なった。1) テレビで自分の顔を見る。2) テストパターンを見る。3) 西部劇を見る。

その結果、客観的自覚を最も分散させたと思われる3)の条件の被験者は、他の条件の被験者よりも自己への肯定的な態度を強めた。

これらの研究から、客観点自覚の程度は自己評価や感情経験に影響を及ぼすことがわかる。

他方、人の帰属作用は自尊心の強さによって影響されることが示されている (Fitch, 1970; 鹿内, 1978)。したがって、自尊感情に影響を及ぼすことが示されている客観的自覚は、帰属作用に影響すると考えられる。

Duval & Wicklund (1973) は第二実験の仮想的な状況に対する反応の分析から、客観的自覚の高い条件の方が低い条件よりも自己への責任の帰属の強いことを明らかにした。

また、Arkin & Duval (1975) は、実験事態をビデオ・テープに撮る条件（高客観的自覚条件）と撮らない条件（低客観的自覚条件）を用いて、行為者と観察者の帰属の違いを吟味した。その結果、客観的自覚が高い条件においては、行為者は観察者よりも状況への帰属が弱い

ことが判明した。

この研究では Jones & Nisbett (1972) に示された行為者と観察者の帰属が逆転している。よって、Duval & Wicklund (1972) の主張する客観的自覚を高めることは、行為者が自己への帰属を強めるのに有効であり、行為者と観察者の帰属の違いを緩和させる条件を示唆するかもしれない。

また、Duval & Wicklund (1973) は第二実験において、客観的自覚が帰属作用に及ぼす効果は結果の性質とは無関係であることを示している。

しかし、Federoff & Harvey (1976) は、被験者が教示を用いて軽いヘビ恐怖症の患者に、脱感作 (desensitization) 療法を行なう事態を用いた実験で、Duval & Wicklund (1973) と異なる結果を得ている。実験では、被験者の治療効果に対する期待が高い条件と低い条件に操作されており、治療結果も成功条件と失敗条件に操作された。治療終了後、被験者は治療結果の原因の帰属を行なった。

その結果、客観的自覚の高い条件では、失敗よりも成功の原因を自己に強く帰属する傾向があり、期待に反した結果は患者に帰属する傾向があった。

この研究は、客観的自覚の効果が、結果の性質や先行期待と結果の一致不一致によって影響されることを示している。

以上の研究から、一定の条件においては、注意の焦点を変えることによって行為者と観察者の帰属を変え得ると言えよう。

5. 心理的視点変換の効果

Jones & Nisbett (1972) は行為者と観察者の帰属の違いが生じる原因の一つに、利用する情報が両者では異なることをあげた。日常の対人関係において利用される情報には、自己と他者の間で決定的な違いがあるのであろうか。一般に、人は社会生活を営む中で、自己の所属する文化や社会の行動様式、貫習等の必要なものを学習していくと思われる。換言すれば、社会的な学習の過程を通じて経験が蓄積されて行くと考えられる。このような経験には他者との相

相互作用が不可避免的に介在すると考えられることから、他者と共通した経験が多く含まれていることになる。そして、これらの共通した経験が基礎となり、相互の理解が可能になると思われる。それにもかかわらず、通常人が他者を観察する時には、自分の立場からのみ観察することが多いと予想される。そのために、他者の置かれている状況や心情を十分に考慮せずに判断を下すことが多いと思われる。

しかし、人には互いに共通した経験があるとすれば、他者の置かれている状況を理解し、その人の身になって考えることによって、他者を共感的に理解することが可能になるであろう。

Aderman, Brehm, & Katz (1974) は、女子大学生に、女性の刺激人物が課題の学習で誤りを犯した時に、電気ショックを受けるビデオ・テープを見せた。被験者は次の三つの条件で観察した。1) 刺激人物の立場に自分を置いて観察する。2) 刺激人物の行動に注意して観察する。3) 刺激人物の情動状態に注意して観察する。被験者は観察が終了後に、形容詞対を含む質問紙に回答した。

その結果、1)の被験者は、2)3)の被験者よりも、刺激人物を魅力的であると評定する傾向が強かった。他方、2)および3)の被験者は、刺激人物をより否定的に評価する傾向が見られた。

この研究は、直接に帰属作用を扱ったものではないが、観察をする時の心理的な視点の置き方の違いが、被験者に対する反応に影響することを示している。よって、観察態度、あるいは心理的視点の違いは、帰属作用においても同様の効果をもつことが期待される。

Regan & Totten (1975) は観察者の視点と帰属作用との関係を吟味し、上記の予測を支持する結果を得ている。実験では、男子被験者に二人の刺激人物が自己紹介の会話をしている場面、ビデオ・テープで観察させた。被験者は、刺激人物がどのように感じているかを想像し、共感的に観察する条件（共感的観察条件とよぶことにする）と刺激人物の動作に注意して観察する条件（標準的観察条件とよぶことにする）とに分けられた。観察が終了後、被験者は

次の点について評定を行なった。1) 刺激人物の行動は、どの程度本人の特性が原因になって生じていたか。2) 刺激人物の行動は、どの程度当該状況の特徴が原因になって生じていたか。

その結果、共感的観察条件の被験者は標準的観察条件の被験者よりも、原因を状況に帰属する傾向が強く、傾性に帰属する傾向は弱かった。坂西 (1983, 1984) も同様の結果を得ている。特に興味深い点は、観察者に共感的視点をとらせただけでは自己の視点から行なう帰属は共感的傾向（外的・状況要因への帰属）を示さないが、行為者と類似の行動を経験させた観察者は、自己の視点から行なう帰属においても共感的傾向を示したことである。

これらの研究は、Jones & Nisbett (1972) の命題に示された観察者の帰属傾向が、共感的な観察によって和らげられることを示しており、観察者の心理的視点の違いが原因の帰属に影響することを実証したものと言えよう。

しかし、何回かふれたように行為者と観察者の帰属は、行動やそれに伴う結果の性質によって異なってくると思われる。Regan & Tottenの研究では、結果がポジティブかネガティブかの問題には言及されていない。

Gould & Sigall (1977) は、行動の結果がポジティブあるいはネガティブである場合に、共感的な観察が原因帰属に及ぼす効果を吟味している。彼らは女性の被験者に、男性が女性に好ましい印象を与えようとする場面をビデオ・テープで観察させた。また、被験者は刺激人物を共感的に観察する条件と標準的に観察する条件に分けられた。さらに、刺激人物は成功する場合と失敗する場合の二条件に分けられた。被験者は観察が終了した後で、刺激人物の成功あるいは失敗の原因について質問紙に回答した。

その結果、共感的に観察を行なった被験者は成功の原因を刺激人物の傾性に帰属し、失敗の原因を状況に帰属する傾向が強いことが明らかになった。他方、標準的に観察を行なった被験者は、結果の性質にかかわらず傾性への帰属を強く行なう傾向があった。

これらの研究から、観察者を当該人物の立場

に立たせたり、当人の気持を考えながら観察させることは、観察者の帰属に変化をもたらす有効な条件であると考えられる。

以上、簡単に行為者と観察者の帰属を変えるのに有効と思われる条件に言及してきた。これらの条件は単に両者の帰属を変えることにとどまらず、Jones & Nisbett の命題に見られる行為者と観察者の帰属の相違を緩和する条件として、積極的な役割を果たすと思われる。

まとめ

概観したように、我々が他者の行動を観察し、さまざまな判断を下す際には、多くの要因が影響していることがわかる。多くの研究が、実験に基礎をおいている点で一般化には限界があるが、いくつかの点で現実の人間関係を考える上で示唆的である。

最も注意しなければならないのは、我々是他者の行動を手がかりに、その行動が生じた原因を探ることが多いが、多くの状況でその原因を行為者自身の傾性に帰しやすい点である。この

場合、必ずしも当人の要因が十分によく理解されているとは限らず、むしろ表面的・外顯的行動からその人を理解している点に問題がある。ここでは、我々に関係の深い教育場面に焦点をあてて考えてみよう。

原野と山口 (1984) は、臨床的活動をつうじて「教師が生徒の行動あるいは性格を観察によって理解したり評定する際、外顯的行動に注目し、それを手がかりにしがちである」と述べ、さらに「そのために、内潜的な性格要因を看過し、外顯的行動の理解に終わることが多い」と述べている。このことは、本稿のⅡの1・4・5で考察した内容に対応しており、すでに Heider (1958) が「個々の行動は……全体の状況を包み込むような傾向のある顕著な特質をもつ」と指摘したことである。我々が他者の外顯的行動から判断するものと、当人の判断するものとがいかにかい違っているかを知るには、原野と山口の資料が役立つ。表1は、担任の教師が中学生1年から3年までの生徒を一人一人日常の行動観察から、社会的行動傾向・性格を次の基準にしたが

表1 反・非社会的行動の教師評定とテスト評定

(原野, 山口 1984)

教師評定	テスト評定		評 定 生 徒 数		反・非社会的 行動重複数(%)
	男・女 総数	生徒数 (%)	反・非社会的行動	生徒数(%)	
反 社 会 的 行 動	男 N=314	91 (17.7)	反社会的行動	43 (47.3)	16 (24.6)
			非 "	22 (24.2)	
	女 N=468	63 (13.4)	反 "	21 (33.3)	9 (25.7)
			非 "	14 (22.2)	
非 社 会 的 行 動	男 N=514	61 (11.9)	非 "	25 (41.0)	15 (34.9)
			反 "	18 (27.9)	
	女 N=468	53 (11.3)	非 "	22 (41.5)	8 (24.2)
			反 "	11 (20.8)	
非・反社会 的 行 動	男 N=514	153 (29.8)	反 "	12 (7.8)	1 (4.3)
			非 "	11 (7.2)	
	女 N=468	158 (33.8)	反 "	12 (7.8)	2 (7.4)
			非 "	15 (9.5)	
非・非社会 的 行 動	男 N=514	130 (25.3)	非 "	12 (9.2)	3 (12.0)
			反 "	13 (10.0)	
	女 N=468	146 (31.2)	非 "	12 (8.2)	2 (7.4)
			反 "	15 (10.3)	

って評定し整理したものである。また同時に、生徒自身による問題行動予測診断調査 (PST・日本文化科学社) の評定を整理したものである。

- (A) 反社会的行動傾向・性格……暴力・反抗・破壊・家出・自己顕示・うそつき・盗みなど社会的規範を免脱する行動傾向・性格
- (B) 非社会的行動傾向・性格……孤独・ノイローゼ・不安・意欲そう失・内閉性など自分の殻にとじこもる傾向

このような、教師と生徒の社会的行動傾向・性格の認知の違いは、問題行動発生の際の因果的判断にも反映してくると予想される。つまり、教師と生徒の問題行動に対する原因帰属のし方に違いが生じることになるのである。こうした教師と生徒の行なう原因帰属が重視される理由は、人が行なう帰属作用には次の機能があると

考えられるからである。

- (1) 現実の対人関係をよりよく理解することを可能にする。
- (2) 今後の自分の行動のし方を容易にする。
- (3) 相手の行動の予測を容易にする。

教師と生徒がそれぞれ問題行動をどのように認知し帰属するかによって、その後の行動・対応のし方が異なり、対人関係そのもののあり方が大きく左右されるのである。

我々は日常いろいろな事柄について判断を下し対応しているわけであるが、その認知過程そのものがさまざまな要因によって影響されていることを意識しているとは限らない。しかし、対人的な問題に適切に対処していくためには、これらの影響要因についても知っておくことが必要であろう。

(1984年10月16日受理)

注

- 1. Kelley (1967) が、外部の実体に原因を帰属する時に、主観的妥当性を吟味するために設定した基準である。合意性とは他の人も同様の反応を示すこと、特異性とは対象によって異なる反応を示すこと、また一貫性とは、対象の提示様式の違いにかかわらず一貫した反応を示し、いつ提示されても同じ反応を示すことである。
- 2. 共変とは、行為の効果の原因が、効果が生じた時に存在し、生じなかった時に存在しない条件に帰属されることを示す。
- 3. この研究は Wicklund (1975) によって引用されたものであるが、テーマや発表年はすべて不明である。

Aderman, D., Brehm, S.S., & Katz, L.B. 1974 Empathic observation of an innocent victim: The just world revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 342-347.

Ames, R. 1983 Teachers' attributions for their own teaching. In J. M. Levine & M. C. Wang (Eds.), *Teacher and student perceptions: Implications for learning*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 105-124.

Arkin, R. M., & Duval, S. 1975 Focus of attention and causal attributions of actors and observers. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 427-438.

坂西友秀 1983 達成行動の帰属作用に及ぼす観察者の視点の効果 心理学研究 53 365-371

坂西友秀 1984 観察者の帰属作用に影響する先行経験及び視点要因の検討 心理学研究 印刷中

Bar-tal, D., & Frieze, I.H. 1976 Attributions of success and failure for actors and observers. *Journal of Research in Personality*, 10, 256-265.

Bem, D.J. 1972 Self perception theory. In Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 6. New York: Academic Press. pp.1-62.

Bradley, G.W. 1978 Self serving biases in the attribution process: An examination of the fact or fiction question. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 56-71.

Carver, C.S. 1979 A cybernetic model of self-attention processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1251-1281.

- Duval, S., & Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self awareness*. New York: Academic Press.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1973 Effects of objective self-awareness on attribution of causality. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 17-31.
- Eisen, S.V. 1979 Actor-observer differences in information inference and causal attribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 261-272.
- Ender, P.B., & Bohart, A.C. 1974. Attributions of success and failure. *Psychological Reports*, 35, 275-278.
- Feather, N.T. 1969 Attributions of responsibility and valence of success and failure in relation to initial confidence and task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 129-144.
- Feather, N.T., & Simon, J.G. 1971a Attribution of responsibility and valence of outcome in relation to initial confidence and success and failure of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, 18, 173-188.
- Feather, N.T., & Simon, J.G. 1971b Causal attributions for success and failure in relation to expectations of success based upon selective or manipulative controls. *Journal of Personality*, 39, 527-541.
- Federoff, N.A., & Harvey, J.H. 1976 Focus of attention, self-esteem, and the attribution of causality. *Journal of Research in Personality*, 10, 336-345.
- Gould, R., & Sigall, H. 1977 The effect of empathy and outcome on attribution: An examination of the divergent-perspective hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 480-491.
- Hansen, R.D., & Donoghue, J.M. 1977 The power of consensus: Information derived from one's own and others' behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 294-302.
- Hansen, R.D., & Lowe, C.A. 1976 Distinctiveness and consensus: The influence of behavioral information on actors' and observers' attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 425-433.
- Hansen, R.D., & Stonner, D.M. 1978 Attributes and attributions: Inferring stimulus properties, actors' dispositions and causes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 657-667.
- Harvey, J. H., Arkin, R.M., Gleason, J.M., & Johnston, S. 1974 Effect of expected and observed outcome of an action on the differential causal attributions of actor and observer. *Journal of Personality*, 42, 62-77.
- Heider, F. 1958 *The psychology of inter-personal relations*. New York: Willey
(大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- 原野広太郎・山口正二 1984 生徒の反・非社会的行動の教師評定と性格検査評定の比較研究, 日本教育心理学会第26回大会発表論文集 446-449
- Ickes, W.J., Wicklund, R. A., Ferris, C.B. 1973 Objective self-awareness and self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 202-219.
- Jones, E.E., & Nisbett, R.E. 1972 The actor and observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E.E. Jones, D.E. Kanouse, H.H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown. N. J.:

- General Learning Press. Pp. 79-94.
- Kelley, H.H. 1967 Attribution theory in social psychology, In D. Levine (Ed.), *Nebraska Symposium on motivation*. vol. 15. Lincoln, Nebraska:University of Nebraska. Pp. 192-237.
- Kelley, H.H. 1973 The process of causal attribution. *American Psychologist*, 107-128.
- Kelley, H.H. & Michela, J.L. 1980 Attribution theory and research. *Annual Review of Psychology*, 31, 457-501.
- Kuiper, N.A. 1978 Depressions and causal attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 236-246.
- Larson, J.R. 1977 Evidence for a self-serving bias in the attribution of causality. *Journal of Personality*, 45, 430-441.
- Luginbuhl, J.E.R., Crowe, D.H., & Kahan, J.P. 1975 Causal attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 86-93.
- Miller, D.T., & Ross, M. 1975 Self-serving biases in the attribution of causality: Fact or fiction? *Psychological Bulletin*, 82, 213-225.
- Nisbett, R.E., & Caputo, G.C. 1971 Personality traits: Why other people do the things they do. Unpublished manuscript. Yale University, Cited in E.E. Jones & R.E. Nisbett, The actor and observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E.E. Jones, D.E. Kanouse, H.H. Kelley, R.E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner. 1972 *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, N.J.:General Learning Press.
- Regan, D.T., & Totten, J. 1975 Empathy and attribution: Turning observers into actors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 850-856.
- Rosenfield, D., & Stephan, W. G. 1978 Sex difference in attributions for sex-typed tasks. *Journal of Personality*, 46, 244-259.
- Ross, L., & Greene, D., & House, P. 1977 The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution process. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 279-301.
- 鹿内啓子 1978 成功・失敗の帰属作用に及ぼす self-esteem の影響 実験社会心理学研究, 18, 35-46.
- Snyder, M.L., Stephan, W.G., & Rosenfield, D. 1978 Attributional egotism. In J. H. Harvey W. Ickes, & R.F. Kidd(Eds.), *New directions in attribution research*, Vol. 2. Hillsdale, N.J.:Lawrence Erlbaum Associates, Pp. 91-117.
- Stokols, D., & Schopler, J. 1973 Reaction to victims under conditions of situational detachment: The effect of responsibility, severity, and expected future interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 199-209.
- Storms, M.D. 1973 Videotape and the attribution process: Reversing actors' and observers' point of view. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 165-175.
- Talor, S.E., & Fiske, S.T. 1975 Point of view and perceptions of causality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 439-445.
- Taylor, S.E., & Koivumaki, J.H. 1976 The perception of self and others: Acquaintanceship, affect, and actor-observer differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 403-408.

430-408.

- Wells, G. L., Petty, R. E., Harkins, S. G., Kagehiro, D., & Harvey, J. H. 1977 Anticipated discussion of interpretation eliminates actor-observer differences in the attribution of causality. *Sociometry*, 40, 247-253.
- Wortman, C. B., Costanzo, P. R., & Witt, T. R. 1973 Effect of anticipated performance on the attributions of causality to self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 327-381.
- Zuckerman, M. 1979 Attributions of success and failure revisited, or: The motivational bias is alive and well in attribution theory. *Journal of Personality*, 47, 245-287.